
アリスウォーズ

伊達真樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスウォーズ

【Nコード】

N3890BA

【作者名】

伊達真樹

【あらすじ】

量子コンピュータが作り出すキャロルと呼ばれる電脳世界。

奥森京はリアルでは貧弱な青年だが、キャロルでは正義の味方だ。

姉的那由他に迷惑をかけられないと、京は第七有栖スクールに転入する。

スクールの教師は皆、アリソンと呼ばれるアンドロイドだった。

知識としてはあるが、京は一見ただけではアリソンと人間の区別がつかない。

そう、だから、姉的那由他がアリソンだという実感にも乏しかった。

Prologue

刹那の浮遊感の行き着く先は、不思議の国。

空きチャネルのテレビの色とはほど遠い澄み渡った空の下で、奥森京は草原に寝そべっていた。

灰色ではない、目にも鮮やかな青い空。

さらに、青臭いほどの緑の草原。

ああ、なんて……。

二度寝にうつてつけなんだ。

今日から新生活が始まる。だからこそ、いつも以上にのんびりしよう。心の中で理由をつけて、朝の二度寝を楽しむ京だった。

リラックス、リラックス、と唱えながら京は手に人の字を書いて飲み込む。

微かに汗ばんでる手に、思わず苦笑い。

「リラックス、リラックス。リターンズ！」

引き続き、京は手に人の字を書く。

今までろくに外に出たことがなかったんだ、緊張するのも無理はないさ、そう自分に言い聞かせながら。

同じ言葉を繰り返すことで、人は束の間の安定を手に入れることができる、そんなことに漠然と思い至った。音楽だって絵画だって、リフレインが秩序を生み出す。きっと人間に備え付けられたおまじない装置だ。

「大丈夫、大丈夫」

ちくちくする草の上を、京は芋虫のようにごろごろと転がる。

この上なく、幸せだった。

このまま転がり続けて、バターになりたい。

まどろんできた、といういいところで、誰かが草を踏みしめる音がした。ここに来客だなんて、珍しい。もちろん、草原に鍵をかけていたわけではないので誰が来てもおかしくないのだが、こんな辺鄙

な場所を訪問するなんてどこの物好きだろう。
好奇心に負けて京は身体を起こす。

「ルルルランランラー」

少女らしい少女、と、トートロジーな形容をしたくなるメルヘンな女の子がいた。

不思議の国にお誘え向きの黒いドレスの少女が、風に舞う花卉のようにワルツを踊っている。

三拍子を取りながら、回転してるのだ。

草原に咲く、頭がお花畑な女の子。

ルルル、という鼻歌が聞こえるほどの陽気さで、少女は軽やかなステップでくるくると回りながら、京に近づいてきた。

近づくにつれ、顔の輪郭もはっきりしてくる。

端正だが幼さの残る中性的な顔が、黒いドレスの上にちょこんと乗っかっている。ゴシックめいたドレスと相まって、お人形のような印象を受ける。愛らしい少女は、ふわふわの黒いフリルスカーートを膨らませて、金髪のツインテールを弾ませていた。

つつい、見蕩れてしまう。それほど、目の前の少女は可愛かった。

（これは、ラブコメの神様が与えたもうた、ロマンスのキツカケなのか！）

京は自らを物語の主人公だと勘違いしている程度に、内向的で自己完結的な性格だった。

京の思いなど露知らず、少女は手が伸ばせば届く距離まで近づいた。

そこで少女は回転を止め、京を見つめた。

小首をかしげながら、軽く目を細めている。

「ねえ、キミはどこにいるの？」

「え？」

「なんとなくさ、どこにいるのかなあ、って、唐突に聞きたくなる顔をしてたんだよ、キミ」

話しかけられたことにまず驚き、問いかけの奇妙さについて驚き、京は間抜けな顔で聞き返すしかなかった。

どこにいるのか聞きたくなる顔ってどんなだよ、と京は思ったが、それを口にはしないで少女の問いに答えた。

これはラブコメの神様の試練かもしれない、と京はとびっきりの洒落た返しをした。

「君の瞳の中にいるよ」

「何それ、きもい」

渾身の文句は、だだすべりだった。

「きもいと言われようがなんと言われようが、俺がどこにいるのか、そんなの見たまんまだろ」

「どうか。じゃあさ、ボクはどこにいるのかな？」

「俺の瞳の中」

「あらやだ、きもいですわ」

「……ちよつとだけ、マシになった、のか？」

どこにいるか、そんなの他者なくして語れないと京は思っていた。相手の視線を介して固定される、存在なんて、危ういもの。だから誰々の瞳の中という表現は、京としては気に入るものだっただけに、きもいと言われてちよつとシヨックだったりした。

（泣かない、泣かない）

泣きそうな京である。

少女は手を後ろに組んで、俯く京の顔を覗き込むように見上げてくる。

「うーん、なんかさあ、キミ、どこかで会ったことない？」

「さ、さあ、初対面だと思うけど」

「ん？ なんだよ、どうして目逸らすんだよ。なんか怪しいな、じろじろ」

ぐいぐいと容赦なく顔を近づける少女に、京は思わず後ずさりした。

何も、京にやましいところがあって目を逸らしたわけではなかつ

た。目の前の少女と過去に会った記憶はなかったし、元々、京は昔のことなどよく覚えていない。

ただ、間近で見た少女が思いのほか可愛くて照れてしまったただけだ。緑がかった金色の瞳は、アーモンド型。頭の上でまとめるツインテールからも、何だか甘い香りがする。黒のドレスの胸元は控えめながらも膨らんでいて、どうにも目のやり場に困った。

自分より年上の先生や年下のクラスメイトとは『学校』で話すことがあっても、京は同年代と関わる機会が今までなかった。

「ふうん、まあいいか。ボクの名前はヨル。キミは？」

「奥森京」

「うーん、名前聞いたらピンとくるかと思ったけど、こないなあ……。ねえ、キョウくんって、実は偽名だったりしない？ 心と体と名前が、なんか別々な感じ」

「そう言われてもなあ。俺は物心ついたときから奥森京だし、それは、えっとヨルだって一緒だろ？」

「チツチツチ、それが違うんだよ、これが。ボクはヨルであることを選んだ、少なくとも、今は」

人差し指を左右にリズムカルに振りながら、ヨルは自慢気に続ける。「ボクは常にボクであることを強く望んでる。それは上っ面が変わってもボクで在り続けることができるということなんだ。キョウくんみたいに、なんだかよくわからないけどふわふわしてて、どこにいるのかわからない人にはわからないかな」

「俺のどこがふわふわしてるんだよ」

「存在？ 名前？ 魂？ あと、顔……は、うん、なんだか眠そうな顔してるしふわふわだね」

「朝っぱらからこうも理不尽にふわふわ扱いされるなんて……」
気落ちした京を尻目に、ヨルは楽しそうだ。もちろん、京もヨルとの会話を楽しんでる自覚はあった。

ヨルはこういう結論の出ないやり取りが好きなんだろうな、と京はこの短時間で感じていたし、それ自体は京も望むところだった。

ゆつくりと、自分の思考に沈んでいくのは心地よい。深く、独りで、思考の海に潜っていく。

だが、その度に、京は見えない壁に阻まれて、先に行けなくなってしまう。

京は、幼い頃の記憶が曖昧なのだ。

曖昧な記憶の隙間は、はつきりとした頭痛が埋めていた。何か自分にとって大切だったことを思い出せそうなときに限って、頭が痛くなる。

姉の那由他がいなかったら、とつくに京は気が狂ってしまったかもしれない。

今も、那由他は京の帰りを待ちながら朝食を作ってることだろう。

那由他の料理の腕はこれっぽっちも期待してないどころか、肉体的および精神的な健康のためにも自分で料理を勉強しようかというレベルだったが、かけがえのない唯一の家族である那由他が料理好きということもあり、毎日麗しい姉弟愛を手料理で試されていた。

料理に限ったことではない。

那由他は、否、那由他和京の二人は、致命的なまでに欠けていた。一人じゃ生きていけない、あやふやな存在だった。

だからこそ。

京の存在を那由他が支え。

那由他の存在を京が支え。

二人は、比喻ではなく支えあって生きていくしかなかった。そうせざるを得なかった。ヨルがふわふわしていると京を評価するのも、ある意味では慧眼だった。

「確かに、俺はふわふわかもね」

「でしょ？ やっぱ、ボクの目に狂いはなかった！ これからはふわふわキヨウくんだ！ 略して、ふわキヨンだ！」

「断固反対したいね、そのあだ名は！」

「つまらない、可愛いのに」

「ヨルだって、ふわふわしてるじゃん。格好とか」

「失礼な奴だな！ 格好は、ただの趣味。ボクくらいになると、外見なんて些事なんだよ。たとえば、ボクの耳がウサ耳になったでしょう。これでもボクはボクなんだ」

そう言うと、冗談のような鮮やかさで、ヨルの頭にウサギの耳が生えた。

まるで、リデルのように。

「え？」

「ふふん、すごいだろ」

得意気に慎ましい胸を張るヨル。

ありえない。

こんなことはありえないんだ。

不思議の国にもルールがあるのに、目の前のヨルは呆気なくそれを無視して見せた。

ヨルはにやにやと猫のような口で微笑んでいる。

「キヨウくんつてば、驚いた顔も、可愛いなあ」

からかった口調のヨルに脇腹を小突かれそうになり、京は反射的に身体を反らす。

「む！ その身のこなし、意外とキヨウくんはやり手と見た！ そうか…… 本当に、キミはふわふわしてるみたいだね、掴みどころがないっていうか」

「ありがとっ、初めてヨルに誉められたよ」

「可愛い、とはさっきから言ってるよ？」

「俺としては、可愛いは誉め言葉にしたくないの！」

「じゃあさ、さらりと挨拶するみたいに、ボクの目を見て、可愛いって言って」

「え？ あ、ああ。か、かわい……っ て、なんで言わなきゃいけないんだよ！」

「誉め言葉じゃないんでしょ？ 気軽に言おうよ、テイク・イット・イージー」

なんだか負けた気がしたが、京はヨルの望むように言っただけでやるこ

とにした。

「か、か、かわ……」

「って、わっわっ、もうこんな時間じゃん！　たいへんだ、たいへんだ、遅刻しそうだ！　なんちて」

「か、かわいい……って、聞いてねえしっ！」

どこからともなく取り出した懐中時計を確認すると、ヨルは生やした耳をびくびく動かしながら、三月ウサギよろしく慌てた様子で背中を向けた。

ウサ耳含めてヨルは世辞抜きに可愛かったが、それを改めて伝えるには京はウブすぎた。

「ではでは、キヨウくん。キミとはなんだか初めて会った気がしないし、これで最後という気もしないけど、とりあえずバイバイ！　ボクの勘は鋭いからさ、きつと近いうちに会うよ、うん。じゃあね！」

黒いドレスをはためかせ、ヨルは手をバイバイと振りながら草原を駆けていく。

目の前には、突如として現れた落とし穴。

まさに、うさぎのあなだ。

迷うことなく、ヨルは大きく口を開けた穴に、飛び込んだ。一瞬、声を上げそうになった京だが、すぐに思い直して口を噤んだ。

不思議の国の夢から、覚めただけ

ヨルはただリアルに戻っただけだ。

量子コンピュータが作り出す電脳世界、キャラル。

草原も青い空も、もちろんこの場にある京の身体も、全てが1と0の集合体。どんなに本物らしく見えても、リアルではない。

本物のようで偽りの世界。

偽りのようで本物の世界。

キャラルは、仮想世界と呼称するにはあまりにも生々しかった。だがいくらクオリアが忠実に再現されようと、帰るべきリアルがある人間ならば、建造物内など『穴』を論理的に開けられない場所

じゃない限り、いつでも離脱し現実に戻ることができる。

ヨルのように、魔法みたいに。

「ん？ なんだアレ？」

よほど慌てていたのだろう。

穴の近くに、先ほどの懐中時計が落ちていた。

金の細工が施された、手のひら大のシックなデザインの懐中時計だ。京はひとまず懐中時計を拾い、何気なくその蓋を開けた。

「これは……妹、いや姉かな？」

懐中時計の文字盤には写真が埋め込まれていて、同じ患者衣を着た子どもが二人写っていた。髪型こそ違うが瓜二つなので、双子かもしれない。

髪の毛の長い方がヨルだろうか。大きな瞳に生意気そうな口元など、面影は残っている。髪の毛の短い方は姉か妹か。

どうしたものかと京はしばし途方に暮れるが、とりあえず懐中時計は拾っておくことにした。また会える、とヨルは言っていた。なんとなくだが、京も同じことを考えていた。何かヨルとは通ずる、引かれ合うものがある気がしたのだ。

時刻を確認すると、もう七時半だ。

今から朝食を食べて、着替えて、など考えると時間に余裕はない。「初日から遅刻なんて、印象悪すぎるよな」

季節は五月、既に新学期は始まっていたが、京にとっては初登校だ。

京の住む学園都市ハルシティ。その新設スクールである『第七有栖スクール』に、本日付けで京は転入することになっていた。馴染みの『学校』を去り、京は外の世界に触れる必要があった。

これは、自分で望んだことだ。

いつまでも、夢を見続けるわけにはいかない。

今頃は、那由他の朝食も出来上がっていることだろう。

姉の待つリアルに戻るため、京はうさぎのあなに飛び込んだ。落ちる、落ちる、どこまでも落ちる。

落下してるのか、上昇してるのかわからなくなる。

ふっ、と意識が飛ぶ直前。

夢から覚めるのに夢をみるみたいだ、そんなことを、京は思った。

Section 1 - 1

棺桶の蓋のように重く閉ざされたコンソールから出ると、京は思い切り伸びをした。

「すうーはあー」

溜息と深呼吸をないまぜにしながら、京は硬く強張った首を鳴らした。

まったくもって自慢じゃないことだが、京は体力には滅法自信がなかった。キャラルなら羽が生えたかのように軽い身体も、リアルだとちよつと走っただけですぐに息が上がってしまう。

耳鳴りがし、頭も少し重かった。

現実に戻ったときに伴ういつもの後遺症か、やや動悸も速くなっている。じつとりと冷や汗も出る。手は、震えてない。中の下といった体調だな、と京は思った。

慣れてるとはいえ、辛いことには変わりがない。

京はサイドテーブルに置いてある錠剤を口に入れ飲み込んだ。副作用もあるのだが、これがなければ京は日常生活もままならなかった。

すうー、っと耳鳴りと頭痛が収まるのを感じながら、京は出てきたばかりのコンソールを見下ろす。

正式名称、ラビットホール。

電脳世界キャラルへ落ちるための「うさぎのあな」だ。他にもただ単にコンソールと呼ばれたり、あるいはその形状からコフィンと呼ばれることもある。

細長く武骨な六角形の箱の中に入り蓋を閉めるという行為は、容易に死を連想させる。コフィン——棺桶と呼ばれるのも頷ける。

キャラルのメカニズムは京にはまったく理解できないほど難しいが、実際にやることはとても簡単だ。

コンソールの中で、夢をみればいい。

夢をみるメカニズムの解明は道半ばだったが、部分的な脳波の解析がキャロル技術の開発に大いに役立った。

人工的に前頭葉を半覚醒状態にさせ、集合的無意識とリンクさせる手法が近年発見されたのだ。オカルト的で不確定な概念である集合的無意識に、キャロルという仮想的な場を与えることで、人々は電脳世界を共有できる。

コンソール内でリアルタイムスキャンした実体をアバターに、人々はキャロルにホールインすることになる。アバターは実体を遜色なくコピーし、アバター自体が個人の判別キーとなっている。

そのため、アバター詐称はキャロルのロジックで強固にプロテクトされていた。

服装を変えるならいくらでも可能だが、アバターを変更することはキャロルのロジックに反する。ヨルがウサ耳を生やしたことに京が驚いたのは、完全にそれがロジックを無視した行為だったからだ。キャロルのロジックを破ることはハッキングレベルでは到底足りない。現実で太陽が西から昇るのと同じ、ある種の『奇蹟』でも起こさなければ。

あれこれ京が考えてると、奥森那由他がドアの隙間から顔を覗かせた。

ひょっこり、といった感じで端正な顔を半分ほど出して那由他は京をじっと見つめてる。滑らかな銀髪の下にある作り物めいた赤い瞳が、少し京のことを責めているような気がした。

京がキャロルに籠ってばかりだったので、寂しかったのかもしれない。

「時間、大丈夫？」

「あつ、いけね！ 時間がないから、今日は……」

「キョウ……お姉ちゃんいっぱい朝ごはん作ったから、冷めないうちに食べる。それから、スクール行く」

「あ、うん、もちろんだよ。すぐ行く」

時間がないから朝食抜きでスクールに行こうかな、という京の魂

胆は早くも頓挫してしまった。

京の返事に満足したのか、那由他はこくりと愛らしく頷くと、くまさん柄のエプロンで手を拭きながらダイニングに戻っていった。

すらりと伸びた手足に子どもらしいエプロンのギャップは、弟の京から見ても可愛らしかった。

気持ちはいがたいし、合成食料とはいえ残して無駄にするのは忍びないが、那由他の料理の腕前を考慮すると逃げ出したくもなる。「けど、俺は姉さんを、愛してる！　愛があれば、愛があれば、どんな苦境にも立ち向かえるんだ！」

ただ単に朝食をとるには大げさすぎる気合を入れて、京はリビングに向かった。今日も麗しき姉弟愛が試されるときが来た、それだけだ。

この家には、京と那由他の二人で住んでいる。

両親については、京はほとんど覚えてなかった。ぼんやりと、いた、ということは想像できても、記憶のどこを探っても何も見つからない。きっと、例の頭痛の陰に隠れた記憶の一つなのだろう。

気にならないことはなかったが、気にしても解決しようがない。

だから、京はなるべく両親について考えないようにしながら、姉である那由他を慕って生きてきた。

リビングでは、ちょうど那由他が白いテーブルに料理を並べ終えたところだった。

まず、定番の白いご飯と味噌汁。出来たてなのか京が来るのを見計らって温め直したのか、どちらにせよ湯気が立ち昇っているのは嬉しい心遣いだ。

おかずは焼き魚と卵焼き。ついでに納豆まである。

伝統的すぎる朝食メニューだろう。

その全ての食材が、味気ない合成食料だという点を除けば。

今のご時世、合成食料以外の食べ物を胃に入れることは滅多にない。おいしい物を食べたければキャロルのレストランに行けばいいが、悲しいかな電脳空間でいくら食べても胃には何も残らない。

ともかく、食卓に肉がないのは不幸中の幸いだった。合成食料の肉は食えたもんじゃない。あのドロドロしてネバネバした肉モドキは、エイリアンの肉だってもっと上等だろうと思わせる破壊力を秘めている。

「いっぱい、作った」

「う、うん……。ありがと姉さん」

那由他の言葉に曖昧に頷きながら、京は意を決して椅子に座った。確かに、見た目は合成食料だと思わせないほど綺麗だ。もはやこれは芸術の域だろう。リアルでの飲食店は多くないが、店先のディスプレイにするには、那由他の料理は完璧だ。

「い、いただきます」

「めしあがれ」

おそろおそろ、京は箸を伸ばし卵焼きを口に入れる。

これは……。

小首を傾げて、那由他は京の反応を待っている。

「どう、おいしい？」

いつもと変わらない那由他の赤い瞳が、心配そうに揺れているように見えた。

口元を引きつらせ、否、口元に笑みを浮かべ京は答えた。

「甘くて辛くて酸っぱくて、柔らかいようなコシのあるような奇妙な食感のある、前衛的でどこか懐かしい新時代のおふくろの味がしたよ！」

何を言ってるのかさっぱりだった。

はつきり言って、那由他の料理は絶妙にポイズンクッキングな腕前だった。食べられなくないけど食べるのは辛い、その境界線をピンポイントで狙ってるようにしか思えない。吐き出すに吐き出せず、京は涙を浮かべながら無心で咀嚼を繰り返す。

見た目を整える技術が、少しでも味に還元されればいいのに。もしくは、愛情というスパイスが物理的にも味を変えてくれれば。

京がそう思ったのは一度や二度ではない。

那由他は、京がどうして目に涙を溜めてるのだろうと首を傾げていたが、どうやら肯定的に解釈したらしい。

「うん、良かった。じゃあ、これも。ね？」

自分の分の卵焼きも京に分けてくれたのだ。

「あ、ありがとう姉さん！ やっぱ料理に必要なのは愛だよ、愛！」

「愛？ お姉ちゃん、よくわからないけど、良かった」

ほっとしたような那由他の顔を見ると、食べる京に多大な愛を消費させる、という意味で使ったとは口が裂けても言えなかった。

涙ぐましい姉弟愛で朝食を七割ほど食べ終えた頃、京は登校まであまり時間がないことを思い出した。

新しい環境、初めてのスクール。

いくら京が飄々としていても、不安がないと言えば、嘘になる。

「もうすぐ、スクールに行かないと」

「大丈夫？」

「大丈夫大丈夫、問題ない問題ない」

「そう……」

「あつ、もしかして疑ってるの、姉さん？ 大丈夫だよ、今までだって『学校』に行ってたんだし、登校して授業して部活して、やることは変わらないよ……多分」

京の強がり、を、那由他が見抜けたかわからない。きつと、見抜けないだろう。それでも、いい。その方がいい。京にとって那由他は、どちらにせよ大切な家族だった。

「……うん、わかった。キョウなら、大丈夫。もし大丈夫じゃなくても、お姉ちゃんが一緒に行って護ってあげるから、問題ない」

それは困るなあ、と軽く笑い、京は残りの朝食を何とか一気に流し込む。

鼻を掻きたくなるような照れ臭さがあつたが、嬉しかった。那由他にいらぬ心配をかけたくなかったし、どうにかなるだろうと京も樂觀視している。

白いワイシャツにグレイのスラックスという特徴のない制服に着替えると、京は急いで玄関に向かった。

「キヨウ、ちよっと待つ」

那由他がずっと京に近寄り、三つ指をつけるような優雅さで膝立ちになる。

そして、白磁のように透明でしなやかな指を、京の股間に伸ばしていき――

「って、ちよっと姉さん！」

「すぐ、終わる」

（すぐ終わるって、そりゃ誰だってこんな美人に……って何を考えてるんだ！）

京は仄かな期待と緊張で、身動きがとれなかった。

（つん、と指先が触れた気が……。何に？　って、ナニに決まってるだろうに！）

絶賛混乱中の京だった。

ゆっくりと、ソレを掴みながら、下から上へ那由他の指が昇っていく。思わず見惚れてしまうほど洗練され、無駄のない上下運動だ。

そして、那由他の肉感的な唇が開き……。

「チャック開いてた」

「あつ……ああ、あ、ありがと」

一文の中に「あ」を五回使ってしまうほど動揺しながらも、京はなんとか答えた。

これがフィクションだったら。「ふつ、ベタなサーブスイベントだな」とにやにやしながら楽しめる京だったが、実際にやられるとどうしようもなく固まってしまった。

固まってしまった、という部分に気まずい詮索をされないためにも、早く外に出よう。

慌てて靴を履き、玄関を出る。

顔を見るのが恥ずかしかったから、そのまま挨拶。

「いってきます」

いつてらっしやい、という声を背中に感じながら、京はドアを後ろ手で閉めた。

顔が赤くなっているのは見なくてもわかる。

火照った頬を冷やす風は、どこかよそよそしかった。草原の風のように、生命の匂いを感じられないからだろうか。

空を見上げると、今にも泣きだしそうな灰色。それでも、雨が降ることすら稀である。ずっと曖昧に、曇り空のまま。

太陽が燦々と輝く草原の青空は、電脳空間に作り出せても現実には再現できない。

京はスクールへの道を急ぎながら、ぼそりと呟いた。

「リアルには、1も0も存在しないのかな」

量子コンピュータが創り出したキャラルとは、根本的に違う。世の中には真っ白も真っ黒もなく、ただ灰色が広がり、そこには濃淡があるだけ。

「まあ、リアルには美人の姉さんがいるんだし、俺はラッキーだよな」

口笛を吹きながら、京は学園都市ハルシティの一角にある『第七有栖スクール』に向かった。

Section 1 - 2

京や那由他の住むハルシティは、中央に南風原総合研究所、通称HALを擁する学園都市だ。研究所と銘打ってあるが、あくまでHALは企業だ、それも一流の。

最先端の科学技術は、ほぼHALに集まっていると噂される。その特許も含めて独占禁止法に触れるほどの多大な影響力をもっているが、この国の大企業に甘い性質と、そもそも競合する他社が存在しないほどの大きな打撃を【チエシヤ猫の消滅】で人類全体が被ったこともあり、現状のようなHALの独占を許していた。

元は大手の製薬会社ということも手伝ってか、HALは身寄りがなかった子どもたちを支援する慈善活動も積極的に行っていた。

どという経緯か京は知らなかったが、京や那由他の口座にも毎月支援金が振り込まれている。両親が他界し収入がゼロにも関わらず日々暮らしていけるのは、HALの支援があつてこそだ。

京も那由他も月に一回は検診を受けるよう義務付けられているが、それはむしろありがたいことだった。京の薬も那由他の検査も、無償で行ってくれているからだ。

大企業特有の黒い噂もあるようだが、噂は噂。

京自身は、HALに感謝してもし尽くせない気持ちだった。

暮盤目状に整備されたハルシティのセントラルストリートを、京は早足で進む。

家からスクールまでは、徒歩で十分程度だ。急げばまだ間に合うが、生憎その距離を駆け足で行く体力さえ京は持ち合わせていなかった。

「はあ……これがキャロルだったら」

手の甲で汗を拭いながら、京はつぶやいた。

キャロルだったら、アドレスさえわかっていたら一瞬でホールジャンプができる。ネット上のリンクをクリックする程度の労力で、

構造物の外限定という縛りがあるものの瞬く間に移動することができるのだ。

ホールジャンプに慣れ親しみ、さらにほとんど家を出たことがなかった京にとっては、家からスクールまでの距離ですら息が上がってしまう。

京の家からスクールまでの区画は、集合住宅と研究所が交互に並んでいた。コンクリート打ちっ放しの殺風景な佇まいはどちらも同じだが、建物の高さで区別がつく。

研究所は一階のエントランスを別として、全て地下にあるからだ。研究スペースと地上の間には、万が一のためにエアロックで仕切られている。バイオハザードの危険がある生化学研究ばかりではないのだろうが、【チェシヤ猫の消滅】があつてから、どうしても住民はナイーブにならざるを得なかった。

住宅は三階建てか四階建てがほとんどだ。高層ビルが少ないのは、近隣の人口のほとんどが集中しているこのハルシテイでさえも、人がまばらにしかないからだ。人が住んでる部屋よりも空き部屋の方が多いだろう。

「久しぶりに外出たけど、思った以上に、活気がないな」

ゴーストタウンというわけでなく、人とすれ違うこともあるが、街に活気はなかった。

喧騒渦巻くキャロルの市場と比べるべくもない。

地球の人口はピーク時の何分の一になったのだろうか、京は詳しいデータを知らなかったが、半分ではくだらなだろう。

ことの発端は、【チェシヤ猫の消滅】。

人々の顔から笑顔が消え去った、あのクリスマス。

京はアフターチェシヤ世代なのであとからネットで調べた情報しか知らなかったし、そもそも、二十年近く経った今でも、人によって解釈がそれぞれであり、事件の真相は謎に包まれていた。

ただ、大規模なバイオテロが起こったということだけはどの史料も共通している。

環境汚染、それに伴う食糧問題、出生率の極端な低下。

あらゆる方面から【チエシヤ猫の消滅】の余波は人類に、そして地球に打撃を与えた。

中小の製薬会社だったH A Lが台頭してきたのも、奇しくも【チエシヤ猫の消滅】直後であった。混乱した情勢を逆手にとり、順調に拡大を続けて一躍世界有数の大企業になったH A L。

H A Lが製薬会社であることも追い風になって、バイオテロとの関連性を取り沙汰されることも多かった。

何もかもが全て、H A Lの陰謀であったのではとネットではまことしやかに噂されてるが、その他にも宇宙人説や旧時代のオーパーツの暴走説が囁かれてるくらいなので、信憑性は怪しいところだ。

陰謀などという言葉は、一学生である京にはあまり関係ないだろう。あくまで、自分は学生としての自分を全うしていこう。

京が『学校』からスクールに転入を決めたのは、姉の那由他の存在が大きい。キャロルに引きこもってばかりいないで、那由他を支えていきたいと改めて決心する出来事もあった。

世情に疎い京は恥を承知でそのことを那由他に相談したところ、ひと月のうちに第七有栖スクールへの転入が決まっていた。

どうやら京が思っている以上に、奥森家はH A Lに、あるいは南風原に繋がりがあるのかもしれない。気にはなったが、どう切り出しているかわからず、京は素直に転入を決めた。

もちろん『学校』に未練はあったものの、先生も「キョウちゃん、辛くなったらあ、いつでも帰ってくるんだよお」とぐずぐずと子どものように泣きながら応援(?)してくれた。

第二の姉と呼べるほど良くしてくれた先生の期待に応えたい。

何よりしっかりとスクールで成績を出し、那由他にも心配をかけたくなかった。

ただ、一つ問題がある。

京は、第七有栖スクールがどのような教育機関かについては、ほとんど知らされてなかったのだ。

「ここが、第七有栖スクールか……」

時間ぎりぎり、なんとか間に合ったスクールは、清潔感の漂う白いコンクリート製の箱のようだった。周辺の住宅や研究所などは少し隔たった場所に建てられているものの、基本的な作りは似たり寄ったりだ。

上空から見たら、ちょうど立方体の形をしていることだろう。

1も0もない灰色の世界を、四角く切り取る白い小さな世界。

その潔癖さが、妙に胡散臭かった。

まるで、そう、あの病院みたいに。

——白くて、清潔で、胡散臭くて……。

——四角くて、管理的で、同じ年くらいの子どもが集められていて……。

「ッ！ あークソ、また例の頭痛？」

フィルタのかかった記憶に触れたときの、お決まりの頭痛。拡散していた記憶の欠片が収斂してイメージを作ろうとすると、決まって頭が痛くなる。

記憶の中、消毒液の匂いを感じた。

だが、京は思い出せない。もしも思い出たくないことなら、これはこれで幸せなのかもしれない。

とつくに、なんらかの形をとろうとしていた記憶のイメージは霧散してしまった。いつものことだ。

「まあ、なんとかなるでしょ。きっと」

京は前向きな独り言をつぶやき、止まっていた足を一步踏み出す。
(なんとかなる、なんとかなるさ)

頭痛が収まるのを待ってから、京は早歩きでスクールのゲートにくぐった。

Section 1 - 3

京は玄関を抜け、ぐるりと構内を回った。

教室は二三階なのだろうか、自動の小型掃除ロボ、通称パンケーキを除けば誰ともすれ違うことはなかった。

やはり、スクールは直方体であるらしい。採光目的のための窓もなく、空調は自動制御してるようだ。

廊下の照明がこちらの場所をサーチしてライトアップするのが目新しいくらいで、他はいたって静かなものだ。

シンプルなスライドドアと数字の書かれたプレートが並ぶなか、「教員待機室」と書かれた部屋の前で京は立ち止った。

ここなら、間違いなく誰かいるだろう。

京がドアに手をかけようとした矢先に、自動でドアが開き前につんのめる形で部屋に転がり込んだ。

「うわっ、と。し、失礼しまーす！」

「……………はい、どちら様でしょうか？」

京の慌てた声とは対照的な、丁寧な女性の声が返ってきた。

部屋には灰色のデスクがいくつも並べられていて、教員らしきスーツ姿の男女が黙々と手元の端末を操作していた。一様に仏頂面だったが、集中してるときの人の顔なんて、傍から見たらこんなものかもしれない。

京は返事をくれた女性を探した。

入口の近くのデスクに座り、手元の端末から目を離し、京をじっと見つめているのがそうだろう。

眼鏡をかけ黒い髪を腰まで伸ばした、愛想はないが美人な女性だった。どこことなく那由他に似ているかもしれない、と京は思った。

表情を変えず、女性は京に尋ねた。

「スクールの学生ですか？」

明瞭だが抑揚のない口調だ。

「学生ならば学籍IDを言ってください。学生じゃなければ、今すぐお引き取りください」

「あの俺、今日付けでスクールに転入してきた、奥森京っていう。どこに行ったらいいのかわからなくて、その……」

「少々お待ち下さい。確認します」

京の言葉を遮ると、女性は物凄いスピードで小型端末を操作し始めた。まるで機械のような正確さと素早さを感じさせる洗練された動きだった。

「確認しました。担当教員は……はあ、帯刀ですか」

「帯刀先生、っていうのが俺の担任になるんですか？」

「まあ、そうなりますね。彼は……そうですね、いろいろと変わっています、たぶん、アレはアレで良い教師ではないでしょうか？
ねえ？」

「いや、俺に聞かれても」

先ほどまで淡々と答えていた女性が何やら含みのある言い方をする帯刀というのが自分の担任になるのかと、京は内心複雑な気持ちだった。

「では、案内します」

女性が席を立ち奥へと歩いていったので、京も慌ててあとを追う。京のことなど気にならない様子で作業を続ける教員の合間を縫っていく。

そして、周りのデスクと比べると一線を画した、インテリな表現を使えばエントロピーが増大した、率直な言い方をすれば散らかり放題のデスクの前で、女性は足を止めた。

「では、あとはお任せします帯刀先生」

机に足をかけて居眠りをしてるのであるうボサボサ頭のサングラス男に一声かけると、女性は早々にこの場を去ってしまった。

なるほど、確かに言い淀むのも無理はない。

京はとりあえず声をかけてみた。

「あの帯刀先生ですか？」

「……………」

返事がない。

「帯刀先生？」

「……………」

「返事がない、ただの屍のようだ」

「……………」 あっ？ ああ、そうだ」

随分と間が合つて、帯刀は片腕だけで伸びをしながら答えた。

おそらく「帯刀先生ですか？」という問いかけに応えて「ああ、そうだ」と答えたんだろうが、タイミングがずれて自分が屍であることを認めてしまうようなやり取りになってしまった。

この瞬間、返事のある屍が生まれた。

何気ない日常に些細な面白さを見つけて、京は少し緊張がほぐれたような気がした。

「ああ、そうか。お前が奥森京だな？ そっぴや、先生が迎えに行く予定だったんだが、待ってもなかなか来ないんで戻って寝ちまつたんだな」

「もしかして、不良教師ですか？」

つい、思ったことが口に出てしまった。

初対面で不躰だろ、と反省したが帯刀は気にしていないようだ。

「不良教師ねえ……。反面教師って言葉もあるよな。よし、これからは良き反面教師でいよう。これで、構わないだろ」

「いやいや、少しは構いましょうよ」

案内してくれた女性が、アレはアレで良い教師と言った理由がなんとなく理解できた気がした。

「そんなことより、誰かに案内してもらったのか？」

反面教師と自ら名乗ることは、そんなことで済ましてしまつらしい。さらに、アイロンをかけてないしわくちやのズボンから、タバコを取り出し口にくわえる。

もちろん、机には足をかけたまま。

ザ・不良教師だった。

「えつと眼鏡かけて髪が腰くらいまであって、入口の近くにいた女の人です」

「ああ……。たぶん、神田くんかな。例によって愛想は悪いけど、美人な型だっただろ」

「えつ、ああ、美人だと思いますけど、型って言い方は」

「じゃあなんだ、ボディって言い方が好みか？」

「ボディ……。なんか卑猥な表現ですね！」

「まあ、神田くんは四月に配属された最新型だからな。あれでも、ここにいる教員の大部分より感情表現が豊富な方だろう」

「え？ 最新、型？」

「ん？ 彼女を含めて、ここにいる教員は全員アリソンだ。改めて言わなくても、わかるだろ？」

「そうだ……。そんなこと、京も知っていた、ただ、気づかなかっただけ。」

「【人間を象るアリス】」。

「アリス・オブ・ヒューマン。通称アリソンは、姿こそ人間と同じように作られているが、ココロがない機械人形だ。」

「ココロの空白を満たすのは、三原則による人間への忠誠、そして服従。」

「大部分の人間は、一言二言会話すれば人間かアリソンの区別がつく。ぱつと見て、会話せずともアリソンかどうか分かる人間も多いらしい。」

「曰く、なぜかわからないが奇妙。」

「これは不気味の谷現象とも呼ばれ、『人間に近いが、人間とは微妙に異なる』アリソンは少なからず見る者に嫌悪感を与えるとされている。」

「だが、京にはその奇妙さがわからなかった。」

「人間とアリソン。」

「アリソンと人間。」

「その違いが知識としてはわかっているのに、直感としてわからない。」

実感できない。

いったい、何が違うのだろうか？

人間にココロがあるという仮定が間違ってるのでは？

ココロがあれば、身体を機械化したグリフは人間なのか？

ならば、カラダは重要じゃない？

ココロ？

カラダ？

「どうした、奥森。急に難しい顔して」

「ココカラダ」

京は混乱して、意味不明な言葉を発してしまった。

心と身体という哲学的な問いに悩まされ、思わず出てしまった出来の悪い混成語。ハンプティ・ダンプティには遠く及ばない。

訝しげな表情で、帯刀は京を見ていた。

「ここからだ？」

「えっと……。ここからだ、ここから俺のスクールライフが始まるんだッ！ と気合を入れ直してたんですよ！ そうですよ、帯刀先生！」

京は力押しで誤魔化すことにした！

「そういうものか」

まったく帯刀は気にしてないようだ。

この淡々さ、やはり帯刀もアリソンなのだろう。京には区別がないので、アリソンだからといって対応が変わるわけではなかったが一応覚えておくことにした。

「ああ、忘れてた」

そう言っ、帯刀はやっと足を机から下ろすと、引き出しを開けいくつかの冊子が無造作に置いていく。

「あつた、これだ」

京の手に渡されたのは、水色の冊子だった。表紙には、『第七有栖スクール、その崇高なる理念と安定した次世代教育への挑戦』と書かれている。

このご時世、紙の頒布資料なんて贅沢以外の何物でもないが、つまるところ南風原直属のスクールだからこその一種のパフォーマンスなのかもしれない。

「なんですか、これ？」

「なに、ただのパンフレットだよ。本当は口頭で説明すべきなんだろうが、あとで確認してくれ。別に、面倒くさいわけではない。断じて、面倒くさいわけではない」

「はあ……」

明らかに投げやりな口調だ。

面倒くさがりのアリソンもいるのかと、京は感心していいのか悪いのか判断に困った。

「あと、これは重要だから言っておくが、必ず部活に入るように。何かあったときはグループで行動してもらうことになるんだが、部活は、まあなんだ、小隊みたいなもんか」

「部活……てか、小隊って何ですか！ どこかと戦争でもするんですか！」

「戦争ねえ……しないように奮闘するのが、我が第七有栖スクールの崇高なる理念にもあっただろ、確か？　なんだ奥森、パンフレット読んでないのか？」

「今さつき渡されたばかりですからね！」

「そうだったか、なら、仕方ない」

帯刀は京が思っていた以上に適当な教師のようだ。

正直、戦争と言われても京にはピンと来なかった。キャロルに潜ってばかりで世情にはとことん疎かったし、記憶だってあやふやな状態なのだから。

部活ならまだしも、小隊という物騒な言葉を聞かされて、京は憂鬱な気持ちになった。できることなら、厄介事には関わりたくないが、無理な相談だろうか。

「小隊……じゃない、部活って入らないと駄目ですか？」

「駄目だ」

「えっと、それはいつまでに？」

「今日中だ」

さっきまでの態度とは打って変わって、帯刀は強硬な態度だった。何かしらの部活に入らなければいけないなら、体力に不安が残る京は静かで落ち着いた活動がしたかった。

「うーん、体育会系以外もありますか？」

「もちろん。文化系だっていくらでもある。あと……」

「銀河系とか？」

「そうだな。コスプレ系にハッキング系、果てはガンⅡカタ系までいろいろとあるようだ。銀河系くらい、どっかにあるだろ。先生はよく知らんが」

適当に言ったら、適当に同意されてしまった。

まとまりがなさすぎて、どんな部活があるのかこれっぽっちもわからない。

「ともかく、結構な数があるんだ。奥森に合うのもあるはずだ。放課後に部活棟へ行ってみるんだな。渡したパンフにはスクールの案内図も載ってるから、迷うことはないだろ」

「……わかりました」

「それと早速だが、奥森に悲しいお知らせだ」

帯刀は、タバコに火をつけながら言った。

ふう、とゆっくり白い煙を吐く。

サングラスや無造作な髪型を全力で好意的に解釈したら、ハードボイルドな探偵に見えなくもない。

「悲しいお知らせ？」

「ああ、そうだったな。心して聞け……。とつくに、授業は始まっている」

Section 1 - 4

+

帯刀トオルはチェインスマーカーだった。

机に置いてある空き缶にタバコを捨て入れると、二本目のタバコに火をつける。

「これから、忙しくなるな」

口にしたところで仕事が減るわけではない。

こうやって何もしないことで、少なくとも命の次に大事であろうものが、二つも失われていく。

時間とタバコだ。

これは、由々しき事態である。

早急に対策を練らねば、と帯刀は三本目のタバコをくわえる。

机に乱雑に置かれた冊子を片付けていると、なかなか面白そうなものが見つかった。

そういえば、こんなものもあつた気がする。

白い冊子には『教員用アリソンの取り扱いについて』とゴシック体で書かれていた。

表紙の下半分に、デフォルメされた白衣の男が「フランケンシュタイン・コンプレックスなんて、嘘っぱち！」と言いながら、氷の海に沈んでいく怪物を指差している。

なかなかシユールだ。

アリソンは、創造主に名前すら付けてもらえなかった怪物と同じなのだろうか。

「吾輩はアリソンである、名前はまだない」

帯刀はなんとなく口にしたが、これは嘘だった。

表紙をめくる。

そこには序文と称して、かの有名な三原則が引用されていた。

『・第一条 アリソンは人間に危害を加えてはならない。また人間に危害が加わるようなら、それを看過してはいけない。

・第二条 アリソンは人間の命令に従わなければならない。ただし、第一条に反する場合はこの限りではない。

・第三条 アリソンは自己を守らなければならない。ただしそれが第一条、第二条に反しない場合に限る。

備考：グリフはその義体化の程度を問わず、人間として扱う』

アリソンには怪物とは違って各々に名前が与えられたが、同時に三原則も与えられた。

なるほど、フランケンシュタインの怪物と相容れないわけだ。

怪物は怒り、悲しみ、それでも愛を求めた。

一方で、アリソンにはココロがないとされているのだ。

「だが、禅の教えでは肉体と精神は同一だと考えられていたはずだ」

帯刀は、お気に入りの通信教材で禅の存在を知った。

何を隠そう、帯刀という男は通信教育マニアなのだ。

たしか『摩訶不思議、催眠術から古代武術まで』シリーズの第三章『禅VS全』に肉体と精神の問題が書いてある。

禅大全と禅対全を掛けた秀逸なネーミングには、流石の帯刀も興奮を覚えた。

禅の考えで世の中全ての疑問に答えようとする野心的な章なのでよく覚えている。千ページ以上のスペクタクル巨編だ。

ちなみに、百ページ以降はひたすら白紙が続くという奥深い構成も考えさせられた。

色即是空、空即是色である。

そこには、大体こういうことが書いてあった。

『肉体があるから精神があるのであり、精神があるならばそれが宿る肉体がなければならない。すなわち、肉体と精神は不可分。さらに、心だと思っているものは所詮、心の幻であるのだから、同様に

肉体も幻である。水面に映る月の姿なのである。云々』

それならば、肉体をもつアリソンにココロがないと言えるのか？
仮初めのカラダに仮初めのココロがあれば、人間と同じなのではないか？ 人間とアリソンを分かつのは、ただ概念だけか？

だが、そうなる。

「みみずだって、おけらだって、あめんぼだって同じか」

そういうものだ。

手持ちのタバコがなくなってしまったので、帯刀は仕事に取り掛かることにした。

まず、ラクな仕事から。

デスクに埋もれていた手のひら大のタブレット端末を起動させ、メールソフトを立ち上げた。

右手でホログラム・ウィンドウをスクロールさせ、宛先を指でつつく。

本文は音声入力にしよう。

「奥森京、無事登校。ああ……以上で報告終了」

やけに簡単なメールになってしまった。

音声入力だと、いつもこんな感じの帯刀だった。

やらなきゃいけない仕事は残っているが、こういう場合は仕事の優先順位を決めて行動した方がいい。

帯刀は瞬時に、プライオリティを決定した。

すなわち。

「タバコを買いに行こう」

+

奥森那由他は京がスクールに行ってる間、コンソールを掃除していた。

洗剤を付けた軍手を雑巾代わりに、もちろん、細かい溝には綿棒

を使うことも忘れない。

京が帰って来るまでにぴかぴかにしよう、そう心に誓いすでに一時間以上も那由他はこの黒い鉄の箱を磨いていた。

床掃除は専用の小型ロボを使うのが一般的だが、こういった細々した作業はロボには難しい。

ちなみに、奥森家ではポピュラーなパンケーキ型の掃除ロボを使っている。最近は掃除ロボのバリエーションも豊富らしく、風呂掃除専用の子ども型掃除ロボ『AKANAME』という変わり種も発売され話題になった。

もちろん、人型を模したロボはアリソン倫理協会の強い反感を買い、すぐに発売中止となってしまったが。

「よし……。綺麗になった」

コンソールは慎ましく黒光りし、丁寧に掃除された室内に絶妙な居心地の良さを醸し出している。

那由他は家事が得意だと自負している。

苦手だった料理も少しずつ腕が上がってる、と那由他は感じていた。今朝だって、那由他の作った料理を涙ながらに京は全部食べてくれたのだ。

あれが、嬉し涙というものに違いない。

悲しいとき以外にも、涙は出るんだと京は言っていた。

怒ったときは怒り涙、恥ずかしいときは恥ずかし涙、誰かを愛しときは愛し涙を流すのだろう、と那由他は予想していた。

掃除に抜かりがないことを確認し、那由他は一息ついた。

洗濯はほぼ全自動なのでやることはない。掃除も終わった。だが、京がいない。

一人ぼっちの家は、いつもより広く感じた。

京は身体が弱く、ほとんどの時間キャロルにホールインしていた。その間お話ができないことは残念だったが、那由他が京の実体を護っているという実感があった。

だが、京がいないお留守番は暇なだけだ。

スクールでは、うまくやれてるだろうか。

いじめられていたら、助けに行かなければならない。

京を護ることが、那由他の使命なのだから。

「だけど……」

那由他は朝食時の会話を思い出す。

いじめられたら助けに行くと行ったとき、「それは困る」と京は答えた。

那由他が行くと、京にとって何か困ってしまう事態が起るのかもしれない。京を困らせてしまうと、那由他も困る。

そういえば、朝もチャックを閉めてあげただけなのに、何やら様子がおかしかった。

昔はよく一緒にお風呂も入ったのに、最近は別々だ。

「一緒に入る」と誘ってみても、那由他の身体を見ると「い、いやあ、いいよ。ほら、もう俺もいろいろ子どもじゃないし」と顔を赤くして断られた。

顔を赤くした理由を、那由他は考える。そこに、姉離れの原因がある気がしたのだ。

もしかしたら、自分の身体に問題があるのかもしれない。

右手で左手を触ってみる。すべすべしていた。

そのまま、腕に手を伸ばしていく。二の腕は引き締まっていながらも適度に女性らしい弾力があり、ぷにぷにしていた。

さらに、肩から胸に手を這わせる。

そこで、京はよく胸を見て顔を赤くしていたのを思い出した。

何か変なところがあるのかもしれないと、両手で乳房を鷲掴みする。那由他の手では掴みきれない大きさだった。身体にフィットしたエナメル質のボディスーツの上からでも、手に乳房の柔らかさが伝わってきた。触ってる手も、触られてる胸も、なかなか心地良かった。

そのとき、閃いた。

京がどうして顔を赤くしてたのか、那由他にはわかったのだ。

「キヨウは、お姉ちゃんの……触りたかった？」

それを頼むのが恥ずかしかったから、顔を赤くしてたのかもしれない。頼めば、いくらでも触らしてあげるのに。

触る側も、触られる側も気持ちいいのなら、何も気にすることはないと那由他は思った。けれど、「子どもじゃない」京には何か複雑な事情があるのかもしれない。

機会を見つけて、さり気なく聞いてみよう。いや、そうすると恥ずかしがるかもしれないから、さり気なく胸を当ててみよう。それだったら、頼むのが恥ずかしい京も安心だ。

自分の結論に満足した那由他は、時刻を確認した。

京が帰ってくるまで、まだまだ時間がある。

いつもより時間が経つのが遅く感じられた。

早く、帰ってきてほしい。

一人だと、この家は広すぎる。

「……こういうの、寂しい、って言うの？」

口にしてみたが、しっくりこない。

あるのは、コトバだけ。

アリソンの那由他には、寂しいというココロがわからなかった。

Section 1 - 5

「何か、わからないところがありますか？」

正直、わからないことだらけだった。

京は女教師の抑揚の少ない声を聞きながら、電子黒板を凝視する。遅れて教室に入った京は、自己紹介もそこそこに早速授業を受けることになったのだ。クラスメイトに奇異の視線を向けられつつ、京は指定された席に腰を下ろした。

幸か不幸か、隣は空席。

変な気を使わないで済むのはありがたかったが、かえってわからないことがあつたときに気軽に聞く相手もない。

「質問がないようなので、次に進みます」

女教師が、ずっと右手を軽く上に動かすと、電子黒板の内容が一瞬で変わった。

今は「現代史」の授業。

あの【チエシャ猫の消滅】以降は「現代史」として、それ以前は「近代史」として扱うということは、授業の冒頭で説明を受けた。

ちょうど【チエシャ猫の消滅】を境に、世界情勢は大きく変わった。

直接的間接的なテロの犠牲者は億にのぼり、地球規模の環境汚染は生存者に対しても出生率の低下などさまざまな後遺症を残した。

チエシャ猫の爪痕は、根深い。

灰色の雲に覆われ、雨が降ることも陽の光が注ぎこむこともしない異常気象もその一つだった。

環境破壊による食糧不足。

化石燃料枯渇によるエネルギー問題。

今に始まったことではなかったが、【チエシャ猫の消滅】をきっかけに問題が深刻化したのも事実だ。

京も普段から合成食料しか口にせず灰色の空を眺めてリアルとキ

ヤロルの違いを憂いていたが、ここまで事態がややこしくなっていたとは知らなかった。

「人間はこの世界的危機と対峙して、大きく三つの立場に分かれまして」

女教師（彼女もアリソンだということは後ろの席の生徒にさり気なく確認した）が指で円を三つ描く。

すると、電子黒板にも三つの円が現れた。

「一つ。『機械仕掛けの箱舟に人類の未来を託した立場』。みなさんもご存知のキャロルに人類を補完しようという立場です。元々キャロルは人口生命体リデルのために作られた実験的仮想世界でしたが、テロ以降、人間も利用できるよう再設計されました。

長時間、具体的な数字を出すと六時間以上のホールインは脳への負担が大きく、技術的に箱舟計画の実現は遠いと言われています。確認されている連続ホールイン記録は三日ですが、記録保持者は日常生活が送れるまでひと月のリハビリが必要なほど衰弱していました。

また、何度も忠告していることではありますが、極端にこの立場に傾倒するカルト集団も存在します。彼らは、危険です。間違ってもみなさんはバランスになるということを忘れないようにしてください」

「ハイ」

恐らく何度も繰り返されてる問答なのだろう、生徒たちは儀礼的に答えていた。

カルト集団の存在など京は初めて聞いたが、それ以上に違和感があったのは連続ホールイン記録についてだ。

（え？ 俺、平気で一週間くらいぶっ通しでキャロルに潜ってたことあるんだけど……。どういうこと？）

那由他が寂しがるので試したことはないが、やろうと思えば無制限にホールインできる。

だからこそ。

リデルの『学校』に京は通うことができたのだ。

キャロルの先住民、高度な量子コンピュータで制御された人口生命体リデルは、アリソンと違って人間のココロを擬似的にエミュレートしているので不気味の谷現象は起こらない。

ただ人間とリデルを区別するのは簡単だ。

リデルにはウサギのような耳がくっ付いている。

朝の草原であつたヨルが見せてくれたウサ耳のような、一目でそれとわかる特徴がリデルには付加されていた。

アバターを変えただけでなく、リデルと同じウサ耳を生やしたところに、ヨルの人を食つたような性格が表れていると京は思った。

どうやってキャロルのロジックに逆らつてアバターを改変したのかは、京にはまだわからなかった。

「そういえば、うちのクラスの連続ホールイン記録保持者は朝風くんでしたね。確か丸一日ホールインしたことがあつたはずです。彼は……はあ、今日も遅刻ですか」

女教師は京の隣の空席に目を遣つて、溜息をついた。

京の隣の席は朝風というらしい。

彼、という三人称で男だとわかり、なんだか少しだけ悲しい気持ちになつたのは言うまでもない。

クラス一の記録保持者である朝風と比べても、連続ホールイン記録は京の方が何枚も上だろう。

伊達にキャロルに引きこもつてないという自負はあつたものの、もしかしたら京は自分が思つてゐる以上に異端だったのかもしれない。転入して早々自分がキャロルに引きこもつてばかりだったことを告白するのは恥ずかしかったので、煮え切らない思いを抱えつつ授業を受け続けた。

「話が逸れました。三つの立場の二つ目。『地球の自然治癒力に託した立場』。こちらはキャロルを悪、リアルを善として、荒廃した自然を改善しようという立場です。

言葉だけ見れば綺麗ですが、過酷な環境でも生き残れるようにと

度が過ぎたグリフ化、つまり義体化を施してる場合が多く、活動内容は近代の武装テロリストとなんら変わりありません。

キャロルが人体に悪影響を与えると根拠のないデマを流したり、スクールの母体であるHALの研究所を襲撃したりと、みなさんも追々関わってくる相手だということを忘れないようしてください」

「ハイ」

グリフ化した武装テロリストと関わらなきゃいけないのかよ、と京がツツコミを入れようにも、他の生徒は既に承知済みらしい。

授業内容からして、スクールが京の知ってる『学校』とは異なるということにはわかった。部活を小隊みたいなもの、と説明した帯刀の言葉も思い出される。

これからのスクール生活に不安を感じ始めた京の後ろで、何やら女子生徒が小声で話しあっていた。

「でもさー、あたしの彼氏ってグリフだけどころじゃ優しいんだよねー。意外に繊細っていうかー」

「わかるわかる。ギャップがいいんだよねー」

「だよー」

「このまえもさー」

といった具合に、段々とのろけ話に発展していく。爆発しろ、と心のなかで毒づきながら京は振り向かず電子黒板を眺めていた。

「コホン」

女教師は咳払いを一つし、話を続けた。

「このクラスの生徒は全員ナチュラルですが、スクールにはグリフ化した生徒もいます。グリフ化自体は悪いことはありません。誤った力の使い方が問題なのです。」

校内で喧嘩があった場合はグリフ化した生徒の方が重い処罰を受けますが、みなさんも問題事を起こさないように注意してください」
ただでさえリアルでの体力に欠ける京は、校内での喧嘩はなおさら避けて通らなければならぬ。

痣でも作って帰ったら、那由他に心配をかけてしまう。心配され

るのは嬉しいが、那由他にはなるべく自分が一人でも問題ないということを示したかった。一度でも芯から甘えてしまおうと加減なく甘えてしまう気がしていたからこそ、余計に。

教室内が静かになったところで、女教師は続けた。

「では、授業を続けます。三つ目は、私たち『次の世代に託した立場』です。リアルとキャラル、どちらかに偏ることなく、人類の対立を平定して種の保存に向けて一致団結することを目指しています。HALが中心となり全国に研究所を備えた学園都市を建設し、そこにスクールを併設しています。第七有栖スクールは歴史の浅い新設校ですが、ここ一年で確実に実績をあげています。みなさんにも

……」

世界の balans。リアルとキャラルの管理。アリソンとリデルのよき理解者。対立を平定し人類を一つに。どれもが正論だったが、同様に独善的でもあると京は感じた。

同じような言葉の繰り返しに、眠たくなってきた。もしかしたら。

京はリアルに活動制限があるのかもしれない。

これはホールインに制限がない代償なのか。

だったら、京にとってはどちらがホンモノだろう。

実体があるリアルか。

虚構であるキャラルか。

わからない、蝶が夢をみてるだけかもしれない。

夢をみてるのだ、リアルでもキャラルでも。

ぼんやりとした意識の中。

身体が溶けていくような柔らかなまどろみ。

京は机に頬をつけて、眠りの国に落ちていった。

Section 1 - 6

目を開けると、そこは不思議の国だった。

緑の草原と青い空が広がる、京のホームアドレス。

間違いない、ここはキャロルだ。

コンソールなしでホールインするはずがないので、これは京の夢だ。度々、京はキャロルの夢をみていた。

身体は自由に動き、意識もある。

明晰夢というやつだろう。

「つてことは、俺、転入早々で授業中居眠りをしてるわけか……。
我ながら、本当に体力ないな」

退屈な授業にも問題がある、と責任転嫁したかったが、この体力のなさはいずれ克服しなければならぬ。

とはいえ、今戻っても退屈な授業があるばかりなので、京は気分転換にキャロルをぶらつくことにした。

たとえ夢でも、いや夢だからこそ、息抜きにはちょうどいい。

スクールに向かう途中で閑散としたリアルな街並みを目にしたので、人混みが恋しくなった。

「なら、やっぱりあそこかな」

京は目を閉じ、転移履歴を検索する。

ターゲット。ドードー市場。

目的の座標を念じる。

すると深い暗闇が一瞬訪れ、眩いほどの真っ白な光に身体が包まれた。

次いで、身体がバラバラの粒子になったような感覚。

草原を吹き抜ける風とともに、京の姿は草原から消え去った。

京がジャンプした先は、買い物客で賑わうマーケットだった。行き交う客も店を構える商人も、ほとんどが耳付きのリデルだ。

リデルはキャロルに住む人口生命体といえ、人間と同じように生活すれば恋をして子をなすこともある。

ウサギのような耳が付いてる他には一見した違いはないが、その他に人間とは二つの大きな違いがある。

一つ。当然のことながら、量子コンピュータが生み出した人工生命であるリデルはリアルには行けない。このキャロルという電脳空間だけが、彼らの世界なのだ。

二つ。人間とリデルでは圧倒的な力の差がある。リデルの成人男性とホールインを覚えたての女の子が力比べをしたら、十中八九、人間の女の子が勝ってしまうほどだ。

人間が作り出したモノなのだ、人間に脅威が生まれるように作るわけがないのはわかるが、京はどうしても理不尽だと感じてしまう。京が『学校』に通っていたとき、一番苦手だったのが体育の授業だった。リデルと混じって身体を動かすのは加減が難しい。

手加減が上手くなるにつれて、京は言い知れぬ罪悪感を覚えていった。

ふいに『学校』が懐かしくなっていてジャンプしようと思ったが、これは夢。

どうせなら、スクールが落ち着いてからみんなに会いに行こうと京は思っていた。そのときに、先生に近況を報告すればいい。

考えがまとまったところで、京は適当に夢を楽しむことにした。石造りの市場通りを闊歩し始める。

五メートルほどの狭い幅の通りに、露店や客がこつた返していた。それぞれが生き生きとした表情で、時折ウサ耳を震わせては笑いあっている。

ハルシテイにない活気が、この場所にはある。それを眺めてるだけで、京はなんだか楽しくなってきた。

人間のためリデルが奉仕をするマーケットも多いが、ここドードー市場はリデルのためのマーケットだ。

人間に対するリデルの反応は、恐れをなして避けるか、あるいは

媚びへつらって下手に出るかがほとんどだが、京はここでは顔馴染みだった。

「あら？ キョウくんじゃないの、どうしたのこんな時間に？ 学校あるんじゃないの？」

「そうなんだけど、なんか俺、今さ、夢みてんだよ」

気さくに声をかけてくれた果物店のおばさんは、京の返答がよほど面白かったのか、けらけらと笑いだした。酒樽のような大きな身体と、相対的に小さく見えるウサ耳が豪快に揺れる。

「アハハハ。そうかいそうかい。夢みてんじゃ仕方ないね。ほれ、このリングでも食べて早く目を覚まして学校に行くんだよ」

「おっと、ありがとう」

おばさんが放ったリングを掴み礼を言うと、京はその場を去った。こんなやり取りは、日常茶飯事。

リデルと親しくなる才能でもあるのか、あるいはホールインし続けることができる特異体質が影響してるのか、京はすぐにリデルと打ち解けることができた。

リデルの中にも人間を毛嫌いしてる者も多いらしいが、人間嫌いのリデルにさえ「お前は人間にしておくのが惜しい」と言わしめたこともある京だ。

たまに、自分が人間かリデルかわからなくなる。

那由他がいなければ、夢から覚めることなくキャロルに居続けるかもしれない、そんなことをふと思った。

「姉さんも、キャロルに来れたらいいのにな」

京のたった一人の家族であり、姉であり、かけがえのない大切な存在である那由他は、アリソンだった。

アリソンは、夢をみない。

夢をみないアリソンは、キャロルに行けないのだ。

京には、人間とアリソンの区別がつかなかった。

精神的に理由があるのか、何かしら脳に異常があるのかはわからないが、特に区別をつけたいとは思わなかった。その必要も、なか

った。

人間でも、アリソンでも。

那由他は姉であり、家族だ。

「エミユレートとはいえ、リアルでは味わえないリンゴとかオレンジとか、おいしい果物でも食べれば、もしかしたら姉さんの味覚も改善……されなそうだな、うん」

アリソンとはいえ那由他の味覚にはなんら異常はないどころか、むしろ人間より高性能だそうだ。あくまで味覚の趣向に異常があるといったことをまえにこっそりと京も診てもらってるHALLの先生に聞いたことがある。

姉弟愛を発揮して、こればかりは乗り切るしかない。

だから、キャロルではおいしいものを食べよう。

夢の中ではグルメに、これが京の信条だ。

おばさんにもらったリンゴを丸齧りしながら通りを歩いてると、奇妙なりデルを見つけた。

「ルールルランランラー」

どこかで聞いたことのある鼻歌を口ずさみながら、くると踊っている。それだけ聞くと可愛いものだが、踊ってるのはフリフリのドレスを着たヨルではなく、小汚い格好をした腹が出てウサ耳のおっさんだ。

頭がお花畑になるウイルスが流行ってるのだろうか、気をつけなければならぬ。

それにしても、奇妙だ。

いや面妖という言葉が似つかわしい。

可愛い女の子ならともかく、ウサ耳のおっさんが踊ってるのだ、くるくと。これを面妖と言わず、何を面妖と呼ぶのだろう。

(関わらないようにしよう、そうしよう)

右に避ける。

だが、面妖なおじさんも京に合わせて方向転換した。

左、同じ、右、同じ、左、右、左……。

「タララールルル」

ドスの利いた声でルルルと歌うのは、想像以上に破壊力がある。

京はなんとか避けようとするものの、向こうは踊るのに必死で気がついてないようで、距離はどんどん狭まっている。

まったく歓迎したくない偶然が重なったものだ。

結局。

「うわ！」

避ける方向がごとごとく被り、京は面妖なおじさんとぶつかることになった。

思いのほか勢いよくぶつかったので、二人とも尻をついてしまった。

「い、痛いなあー。チミ、ちゃんと前を向いて歩かないと、おじさんぺろぺろしちゃうんだからな！　って、あれその格好は……それに」

面妖なおじさんは、さも面妖な顔をして京を見つめていた。ウサ耳が可愛らしく動いてるのが、かえって気味が悪かった。

「ねえ、チミってさあ」

おじさんが四つん這いで京に接近してくる。

「ねえねえ」

ドスの利いた声、四つん這いのおっさん、ウサ耳。

異次元な怖さだった。

このままでは、宣言通りぺろぺろされてしまう。

こんなクリーチャーは現実にはいないはず。

そう、これは夢なのだ。

最初から夢と認識してたのに、すっかり忘れていた。

「……覚める、夢から覚める、覚めるんだ俺！」

「ど、どうしたんだいチミ」

「俺は、夢から覚めるんだー！ーッ！」

切実な叫び声とともに、京の意識はシャットダウンした。

Section 1 - 7

「うわぁー！ーッ！」

「つと、うわ、びっくりしたなあ」

京が大声を出して跳び起きたのは、スクールの教室だった。幸い授業中ではないようで、教室内にいる生徒もまばらだ。

ウサ耳クリーチャーおじさんの魔の手から逃れ、ペロペロされなかったことに、ひとまず京は安心した。

「もう、いきなり大声出すんだから、びっくりしたじゃないか」

そう言っ腕を組んでるのは、見たことない華奢な少年。京と同じ制服を少しラフに着こなし、胸元が緩く開いてる。どうしてそんなところに目が行ってしまったかといえば、目の前の少年の性別がパツと見てわからなかったからだ。

白金色のショートヘアに、好奇心の強い猫のように大きな瞳、そして全体的な線の細さが中性的な魅力を生み出していた。これでスカートでも履いていれば胸のない女の子に見えたかもしれない。

「えつと、君は？」

「ん？ ああ、そうか。初めまして、奥森京くん。ボクは朝風ユウっていうんだ。キミの隣の席、つまりは愛すべき隣人ってわけだから、これからよろしく」

「愛すべきかどうかはさておき、そうか、君が朝風か。どうして俺の名前を、って聞くのは野暮か……。俺、こんな時期の転入生だし目立つよな」

「まあ、そういうところかな。あと、朝風じゃなくて、ユウって呼んでよ。ボクもキョウくんって呼ぶからさ、ね？ いいでしょ？」

「えっ、あ、ああ。わかった……ユウ」

「なーに照れてるんだよキョウくん。もしかして、そっちの人？ キヤー逃げなきゃ！」

「ば、ばか！ そんなんじゃないやねえよ！」

「あはは、ムキになつてんの」

もちろん京はそっちの人ではなかったが、ユウが「ね？ いいでしょ？」と小首を傾げた仕草が可愛く見えてしまい、不覚にもどきまぎしてしまったのだ。

（惑わされるな惑わされるな）

相手は男、心にしつかりと刻み込んだ京だった。

それにしても、ユウはヨルと似ている気がする。

人を食ったような態度、ころころと変わる表情、色素の薄い髪や肌、華奢な背格好を含め、双子と違っていいレベルだ。

「なあ、ユウって……」

「そんなことより、キヨウくん！」

ヨルを知ってるか聞こうとした矢先、ユウが机をバンと叩いて遮った。

「ねえ、キヨウくんって、ずっとここで居眠りしてたの？」

「へ？ ああ、まあそうだけど」

「いつから？」

「えっと、現代史の授業からかな」

「ふうむ、じゃあ一限から放課後のこの時間まで、ずっとずっと居眠りしてたの？ 本当に？」

「そうなる……って、放課後だって！」

気がつけば、まばらだった生徒もいなくなり、教室内にはユウと二人きりだった。

いったい何時間寝たんだと思って時刻を確認すると、六時間ほど眠っていたらしい。

転入早々、全力で不良生徒だった。

「あちゃー……誰も起こしてくれなかったのかよ」

「そうみたいだね。薄情者が多いんだよ、このクラス」

「そういえば、ユウはいつ来たんだ？」

「今さつき。ちょっとぶらぶらしてたら、楽しくなっちゃって、なんとなく自主休講な気分だったんだ。あっ、もしボクがいたらちや

んと起こしてあげたよ。こう見えて、ボクの半分は義理と人情で出来てるからね」

「残りの半分は何で出来てるんだよ？」

「不義理と非情」

「プラマイゼロだな！」

悪びれずに自主休講してるあたり、ユウも不良生徒と呼べるかもしれない。そういえば、現代史の授業でユウがいないことに気がついた女教師も、慣れたような呆れたような雰囲気だったことを思い出した。

義理と不義理、人情と非情で出来てるのも納得だ。

ユウは腕を組み、考え込むように京を見ていた。

「本当に、眠ってたんだよね？　ここから一步も動かず？　実は夢遊病でフラフラとどっか行っちゃうとかないよね？」

「さすがに、それはないだろ。にしても、やけにこだわるな」

「まあ、ね……。うーん、どういうことだろ……。携帯版なんて試作段階で市場じゃ出回ってるはずもないし、むむむ……」

考え込むユウに、京は思い出しながらつぶやく。

夢。

そう、キャロルの夢をみていたのだ。

「でも……。夢は、みてたな」

「夢？」

「そつ、よく見るんだよ。明晰夢、ってやつかな」

「ど、どんな夢！」

「や、やめてくれ……。思い出すだけでキツいんだよ。おっさんが……ウサ耳のおっさんがペロペロなんて……」

「もしかして、その夢って」

ユウが興奮した様子で身体を乗り出した。少しでも動けば接しそうなほど、京とユウの顔が近づく。

（今動いたらキス……。ってアホなこと考えるな俺！）

異性と比べて警戒心がないのに、見た目は女の子のようなユウに

翻弄される京だった。

勢い込んで何か聞こうとするユウに割って入ったのは、校内アナウンスだった。

「あ、ああーテスト。ただいまマイクのテスト中。こ、これでいいのか？ 何、もう始まつてる？ 馬鹿者！ そういうことは早く言え！ いや、すまん取り乱した。今日転入してきた奥森京。至急、部室ブロックA01に来るように。部活動について話がある。べ、別に強制というわけでは、いや、駄目だ、ここは強気に……は、蜂の巣にされなくなかったら、指定の場所に来るんだな！ い、以上、生徒代表、南風原蒼依」

アナウンスの内容は強迫めいた呼び出しだった。

京は指定の部室ブロックに行かなければ、蜂の巣にされてしまうらしい。

「な、なんだ？ 俺、なんか呼び出しされたみたいけど……。蜂の巣？ 俺はいつの間にそんな物騒な世界に足を踏み入れたんだ……。それに、南風原って」

「ふーん、そっか。お嬢がここで出てくるのか……。なんか興がそがれちゃったな」

お嬢、とその部分だけやけに強調して、ユウは吐き捨てるように言った。

ユウは不機嫌さを隠さず思い切り眉をひそめている。

「なあ、ユウ。南風原ってさ……」

「あんま、その名前言わないでくれる。ハエバラって聞くと、機嫌悪くなるんだよ、ボク」

さっきまでの楽しそうな様子とは打って変わり、ユウはつつけんどんに返す。

南風原。

やはり、アノ南風原なのだろう。

ハルシテイ、いや、今や世界に名を轟かせるHALは南風原一族が仕切っている。南風原という名字は、それだけで意味があり、味

方もそして敵も多い名前だった。

京を呼び出した南風原蒼依もH A L傘下の第七有栖スクールの生徒代表ということは、アノ南風原と考えて間違いないだろう。ユウがお嬢と呼んだのも頷ける。

部活動と聞いて、帯刀に言われてたことを京は思い出す。

「そっか、部活入らなきゃいけないんだっけ。けど、どうして生徒代表が直々に呼び出すんだ？ 俺が何かしたか？ いや、初日から居眠りしたのがバレて、生活指導が入るとか……」

「そっか、そういうことか……キョウくんも……。これで、なんとなく察しがついたけどね。じゃあ、今日はボクこのまま帰るよ。なんかむしゃくしゃするし、家帰って大人しくキャロルに潜ることにする」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。なんだか一人だと不安だから一緒に付いて来てくれな……」

「嫌に決まってるじゃん！ バイバイ、またね！」

まるで逃げるようにユウは教室から出ていってしまった。

よほど南風原のことを毛嫌いしてるのだろう。

「まあ、考えても仕方ないか」

ユウは南風原蒼依個人を嫌ってるのか、南風原一族を嫌ってるのか、京にはわからない。あれだけの大企業だ、嫌う者が多いこともよくわかる。

だが、京は南風原に、より正確にはH A Lに、恩義を感じていた。京と那由他が今まで暮らせてきたのも、H A Lの支援があったからこそだ。

部活には、どちらにせよ入らなければいけないのだ。

ならば、せつかくお呼ばれたのだから、アナウンスに従うのが一番だろう。

（なんとかなる、なんとかなる）

京は気持ちを切り替え、部室ブロックに向かった。

Section 1 - 8

「というわけで、部室ブロックに着いたのはいいが…… いったい A 01 ってどこだよ！」

京はかれこれ三十分ほど部室ブロックを彷徨っていた。

校内にあった案内板で部室ブロックに辿り着いたまでは良かったが、肝心の A 01 が見つからないのだ。

部室ブロックは他のブロック同様、同じようなドアが立ち並ぶなか、プレートに部活名が記載されていた。比較的まとまものから、真面目に活動する気があるのか疑わしいものまで、いろいろある。

美人アリソン教師に踏まれる方法を研究部。

ウサ耳をリアルでも普及したい部。

ミトコンドリア・イ部。

エトセトラエトセトラ……。

訂正。比較的まとも部活はほとんどなく、あまりに意味のわからない部活ばかりだ。

小隊みたいなもの、と帯刀が言っていたことから、実際には部活動というより軍事的かつ暴力的な無法地帯だと思っていたが、想像の斜め上に行く無法地帯だった。

とりあえず取ってつけた部活名で信頼のできる仲間を集めて会員制のような部活を構成してるのか、あるいは趣味は趣味として楽しもうと極端な趣向が表れてるのはわからないが、ろくな部活がない。

「A 01 なんて、どこにも見当たらねえじゃん」

部屋番号のようなものだと思っていたのだが、あいにくそういった番号は見つからなかった。

さっきから行ったり来たりを繰り返すばかりで、何も進展がない。どうしたものかと京が途方に暮れてると、突然、近くのドアが開いた。

「はあっはは！ いい汗をかいた！」

「だははは、そうだな！ やはり、身体を鍛えるのはいい。鍛え、鍛え抜き、それでも足りなければ改造する。これが、現代男子のあべき姿だな！」

ドアから出てきたのは、京のウエストほどの腕の太さをもつ、大柄な男たちだった。

その数、五人。

異常なまでに隆々と発達した筋肉の鎧を身に纏う男たちは、一目でグリフとわかった。筋肉だけならまだしも、その肌が全て、シルバーの金属でコーティングされていたのだ。

男たちはお互いに、メタリックなボディを自慢気に見せびらかしている。

銀色の肉体が、ライトの光を反射して眩しいほどだ。

「お主、かなり大胸筋の改造をしてるな！」

「いやいや、先輩の上腕二頭筋には負けますよ！」

「それよりも、お前らも部長の総合的な筋肉の付き方を見習ったらどうだ。見る、この芸術的な筋肉美を！」

「むっふふふ、誉めるな誉めるな。照れるでないか」

男同士が筋肉を誉めあう姿は、なかなか気味が悪い。

京が部屋のプレートを確認すると『肉体改造部』と書かれていた。グリフの生徒もいるとは授業中も聞いていたが、この部活は肉体改造に特化した生徒が集まってるようだ。

（うわあ、苦手なタイプ。絡まれないようにしないと）

静かに、一步一步、京は後ずさりをした。

関わりあいにならないよう離れ始めた京を、筋肉男の一人が見咎めた。

「ん？ なんだ、お前？ そんなもの欲しそうな目をして、そんなに欲しいのか筋肉が？ 残念だが、この筋肉はオレのものだから、あげられないぞ」

いるかそんなもん、と言いたいのを京は我慢して、とりあえず愛

想笑いを返した。

「い、いやあ、俺は別に筋肉は……」

「おい、こいつ、転入生じゃないか？」

びくり、と京は身体を震わせた。

（まずい。この流れは、実にまずい）

京の不安は的中することになった。

「転入生……部室ブロックをうるうる……筋肉をもの欲しそうに見てる……そうか、お前、入部希望者だな！」

「いえいえいえいえ、滅相もございません」

予想通り、面倒な展開になってしまった。

筋肉をもの欲しそう、ってどんな目だよ！ とツツコミを入れたいのを我慢した。そんなことを口にしたら最後、余計に話がこんがらがりそうだ。

京は必死に首を横に振り否定するが、部長と呼ばれた筋肉男が笑顔でそれを制した。

「よいよい、恥ずかしがらんでも。最初はわしも、今とは比べようもないもやしっ子じゃった。ちょうど、お前さんと同じくらいじゃ。だからこそ、わかる！ お前は、お前が否定しようとも、お前の無意識が、お前の魂が、お前の筋肉が！ 肉体改造をしたがってる……！」

「さ、さすが部長だ……。オレには、本当に嫌がってるようにしか見えなかったぜ……」

「いいや、部長が言うんだ。きつとこいつ、肉体改造願望がオレらの倍はあるに違いない。磨けば光る原石のような筋肉に見えなくもないような気がするような……と、ともかく期待のホープかもしれないぞ」

ここまで外れるプロファイリングも珍しいと思うほど、筋肉部長の意見は的外れだった。

このままでは危険だ。

いくら京が体力に不安があるとはいえ、グリフ化するつもりはな

かった。グリフを否定するつもりもないが、だからといって自分で行きたいかと聞かれたら否だ。

京は笑顔を引き攣らせながら、どうにか話題を逸らそうとする。

「あのー俺、生徒代表さんに呼ばれてA01に行かなきゃいけないんですけど……」

「生徒代表……南風原さんか……」

「どうします部長……さすがに」

伺いを立てる部員を軽く片手で制して、筋肉部長は言った。

「なーに、大丈夫じゃ。さきにこいつを入部させてしまえば、何も問題ない。自分の意志で入った部活を、如何に生徒代表南風原とはいえ、覆せぬじゃろ」

「た、確かに！　さすが部長だ！」

まったく自分の意志で入部する気がない京を尻目に、どんどんと話が転がっていく。何を言っても最早手遅れな気がして、京は目の前が暗くなった。

（どうする、どうするんだ俺！）

このままだと、悪の筋肉部員たちに肉体改造をされて、改造人間オクモリ壱號として新たな一步を踏み出してしまう。

すでに、指を鳴らしながら屈強な筋肉たちが京を取り囲むように陣を組み始めていた。五人は丸太のように太い腕をぐるぐると回してる。

やる気満々といった感じで、とても穏便に勧誘しようという雰囲気気ではない。

恐る恐る、京は確認してみた。

「ち、ちなみに、今このタイミングで、全然これっぽっちも一ミクロンたりとも入部する意思がない、なーんてことを言ったら、ど、どうなるのでしょうか？」

「はあはははっ！　面白いことを言うっ！　……みんな、ウォーミングアップはしとけよ？」

入部を断ったら間違いなく、肉体的教育をされてしまうこと確実

なようだ。

輪から一步前に出て、筋肉部長が京に聞く。

「もちろん、我ら肉体改造部に入部してくれるな？」

「そ、それは……」

「それは？」

「やつぱり、その……嫌というか無理というか」

「イヤ？ ムリ？ どういう意味か、ちょっと筋肉に聞いてみんといけんのぉ」

そう言つて、筋肉部長は京を捕まえんと腕を伸ばしてきた。

迫り来るメタリック加工された腕。

これに掴まれたら、灰色どころか銀色の青春を迎えてしまう。

京の目前に手が届きそうになる。

――刹那、乾いた破裂音が耳をつんざく。

「貴様ら……貴様らか……。部室で待つていてもなかなか来ないと思つて探してみたら……」

廊下の突き当たり、京たちから十メートルほど離れた場所に、声の主がいた。

そこには。

校内にも関わらず銃を構えてる女子生徒が、凜とした佇まいで立っていた。破裂音はあの銃から、つまり、非常識なことに実際に発砲したのだろう。

黒く長い髪を一本にまとめてることに加え、鋭く意志の強そうな瞳のおかげで、近代の映画に出てくるサムライを連想させる。

制服のスカートから覗くすらりと伸びた脚にはホルスターが巻かれ、首にはヘッドホンをかけている。現代のサムライはヒップホップなカウボーイスタイルだった。

「南風原か……見ての通り、わしらは新生を歓迎せんといけんのじゃ。用があるならあとにしてくれ」

口火を切ったのは、筋肉部長だ。

銃声に怯えるその他大勢の部員と比べて、筋肉部長は冷静だった。

南風原という名前にも臆したところがない。流石は部長といったところだろう。

対する南風原蒼依も辛辣だ。

「歓迎？ 貴様らは脳の髄までグリフ化したのか？ 生徒代表として学生の自主的活動であるところの部活に口を挟むつもりはないが、言葉の理解できぬ脳筋相手だと、話は別だな」

「ほう……南風原の。なかなか言いよるのお。おい、お前たち！

まずは生徒代表様に許可をもらわないといけんようじゃ！ 肉体改造部伝統の肉体直談判じゃ！」

肉体直談判。

間違はなく、暴力的解決だろう。

脳筋説が有力になった瞬間だった。

遠巻きに見ていた筋肉部員たちも、部長の威風堂々とした立ち回りに刺激されたのか、いきり立った目で蒼依を見ている。

「さつきはいきなりで驚いたが、考えてみればおれたちの鍛え抜かれた体に銃弾など通じるか！」

手の平を返したように強気になる筋肉部員たちに、蒼依はため息をつきながら返した。

「だから、気軽に撃てたんじゃないか。万が一があって死ぬようなことがあつたら、寝覚めが悪い」

（俺は死ぬけどね！）

その万が一で死ぬかもしれない京の心の叫びは、どうやら届かなかったようだ。

肉体改造部の面々の関心は、完全に京から蒼依に移っていた。今なら……。

京は悩んだ。

このどさくさに紛れて逃げべきか否か。

だが、そもそもここまで来たのも蒼依に呼び出されたからで、何かしら部活には入らなければならない。

ならば、最悪を回避するのがこの場では賢明だと京は判断した。

それがたとえ、無計画だとしても。

「あ、あの！ 肉体改造部の皆さまには大変申し訳ありませんが！ 俺、南風原さんの部活に入部します！ えっと、よろしくお願いしまーすッ！」

出たとこ勝負もいいところ。

京の無計画、ここに極まるといった感じた。

両者の反応は対照的だった。

不敵な笑みを浮かべて満足そうな蒼依と、メタリックな皮膚を震わせて怒髪天を突く形相な肉体改造部一行。

沈黙が支配したこの場を、蒼依が爽やかな声で打破した。

「そうか、もちろん、入部を歓迎しよう！」

勢いよくそこまで言うと、今度は変わって、少しためらうような口調で蒼依は続ける。

「ま、まあ…… 最初からそのつもりで、校内アナウンスで呼び出したというか、すでに部員登録は私の方で済ませてたので、事後承諾を得ればいいという状況だったというか……」

「最初から俺に選択権はないんですね！」

蒼依も肉体改造部も、どちらも横暴という点では共通していると京は思ったが、どうせ横暴ならムキムキでテカテカな筋肉男よりも、凛としてスタイルのいい美少女の方が良かった。

自分も年頃の男であることは、京は自覚した。

それに、南風原がアノ南風原なら、京にとつては恩人に当たる。

信頼できる、という意味でも肉体改造部より数段上だった。

とりあえず、格好だけでも京はファイティングポーズをとって肉体改造部と敵対する意思を示した。

京と蒼依に挟まれた形になった肉体改造部は、どちらにターゲットを絞るか躊躇してるようだったが、より厄介な蒼依に狙いを定めた。

京に脅威がないのはへっぴり腰のファイティングポーズで一目瞭然だったのだろう、とふと自分で悲しくなった。

部長は威嚇するように肩を回しながら言った。

「まあ、奥森とやらはあとにするとして、まずは南風原にしっかりと挨拶するのが筋じやろう。銃も効かず、そんな華奢な体躯でわしらの肉体的勧誘を止めることができるか？」

「現実的に考えたら、難しいだろうな」

控えめな言葉とともに、蒼依はゆつくりとした動作で、首にかけたヘッドホンを装着した。そのまま蒼依は音楽に合わせるように体を揺らし、そして、俯いて目を閉じた。

「なら、非現実的に解決するしかない……」

蒼依の動きが、止まる。

どんな非現実的なアクションを仕掛けてくるのか、様子を見ていたが、一向に動く気配はない。

拳句。

「……………すうー」

蒼依は立ったまま寝息を立て始めた。

「って、寝るのかよ！ 非現実的すぎるだろ！」

思わず、京は声を出してツッコんでしまった。

それとも、蒼依は寝れば寝るほど強くなる特殊な拳法の使い手だったりするのだろうか。

呆氣にとられたのは肉体改造部の面々も同じだった。

完全に舐められてると感じたのだろう、ひとりの部員が無防備にふらつく蒼依に飛びかかった。

「クソッ！ 舐めやがって！」

「……………すうーすうー」

上品な寝息を立てる蒼依は、そのまま前に倒れ込むような格好で体を傾けて。

——消えた。

まるで、最初からそこに誰もいなかったかのように蒼依の姿がこつ然と消えたのだ。

あとに残ったのは、倒れ込むメタリックな大男が一人。

「え？」

京が瞬きした、その刹那の出来事であった。何が起こったか、京には理解ができない。動揺は水面に石を投げ込んだかのように広がる。

果たして、蒼依は京のすぐそばに悠然と立っていた。

「これが非現実的な解決法だ。さっきのは、ただの非現実的足払い。次は……」

楽しそうに言うと、蒼依は重心を一瞬低くし、一気に筋肉男たちとの距離を詰めた。

今度はなんとか目で追えたものの、速い。

ダッシュの勢いを殺さず蒼依は近くの男の下腹部に突き上げるように掌底を入れ、払い腰の要領で廊下に強かに叩きつけた。倒れた男は、そのままピクリとも動かなかった。

金属加工した筋肉の鎧を纏うグリフを、蒼依は易々と倒したのだ。生身の女の子、それもどう見ても華奢な体躯の蒼依に、こんな芸当ができるなんて、まさに非現実的だった。

（けど、キャロルだったら……）

目前で起こったような非現実が、容易に現実になり得る。

キャロルの身体能力は男女の別や筋肉の総量ではなく、自己同一係数という適応度で決まる。だから、蒼依のような華奢な女の子が、筋肉隆々な男子生徒を手玉に取ることも充分にあり得るのだ。

だが、ここはリアルだ。

京がうたた寝をしてキャロルの夢を見てるわけじゃない限り、ここは……。

そこまで考えて、京は蒼依が立ったまま寝ていた状態から驚異的な身体能力を発揮したことに思い至った。

（キャロルの身体能力を、リアルでも発揮してるってことか？ でも、そんなこと……）

それこそ『奇蹟』でも起きない限り、無理だ。

蒼依は余裕な様子で人差し指をいくいく動かしながら、筋肉男た

ちを挑発した。

「どうした、その銀色の体をハリボテか？ 金属ではなくメッキを貼ったエセグリフだったりしてな。どうせあと三人しかいないんだ、まとめて相手をしてやるぞ」

「言いたい放題いいやがつて！」

ここまで虚仮にされて、如何にも肉体的解決が好きそうな男たちが黙っているはずがない。

部長を除く二人が同時に蒼依に襲い掛かった。

自身のウエストの倍近くの大さの腕が間近に迫っても、蒼依は慌てた様子がない。冷静に距離を見極め、バック転で後方に回避した。角度的にも、距離的にも完璧だった。

そう、京にとっては。

（あ、青！ レースの入った青！）

ばっちり、眼福だった。

灰色の現実には、不思議の国の青色が鮮やかに。

それは暗闇を照らす一筋の光。

渡り鳥を導く星の輝き。

どんな言葉を連ねようと、足りなかった。

美人な女の子のパンチラという事象を表現するのに、京のボキヤブラリイはいささか貧困だった。

などと京が余韻に浸ってるうちに、二人は既に倒れていた。どうやって倒したのか気にはなったが、まったくもって後悔してない京だった。

「さあ、あと、一人」

蒼依はやや息が上がった様子で、手の甲で額の汗を拭いながら筋肉部長と対峙した。

部員が次々とやられていく中、動かざること山の如し、状況を見守るだけだったその男は、ゆっくりと首を横に振った。

「いや、もういい。わしらの負けじゃ。奥森とやらも、迷惑をかけたの」

申し訳なさそうに言いながら、筋肉部長はひよいひよいと重そうな大男たちを肩に担いでいく。

納得がいかなかったのは、蒼依だ。

「どうした？ 部活の長として面子はないのか？」

「負けん気が強いのは結構だが……」

片方の肩に二人、計四人の大男を軽々担ぎながら、筋肉部長は振り返ることなく続けた。

「南風原よ…… とういったトリックなのかわしは知らんが、なんにせよ生身の体でその動きは負担が大きすぎる。そこまで無理をしても、その奥森とやらを入部させたいということなら、わしらも引き下がるしかないじゃろ」

あまり無理はするなよ、と最後に一声添えて、大きな歩幅で筋肉部長は去っていった。

「やれやれ…… お見通しか」

蒼依はヘッドホンを外し、大きく息をついた。

「正直、これ以上は厳しかったからな」

「負担が大きいとか以前に、どうやってあんな動きができたのかが不思議だね、俺は」

「ああ…… これが、私の【ワンダー】なんだよ」

「【ワンダー】って……？」

「そんなことより」

蒼依は、まるで京をダンスに誘うかのように手を差し伸べて、さっきまでの険しい表情を幾分和らげ爽やかに言った。

「今日から奥森も、私の部活…… いや、同好会の一員だ。これからよろしく頼む」

「そういえば、なんて部活なんです？」

「ガン!!カタ・コスプレ・ハッキング同好会だ」

「長いよ！ てか、意味わかんねーよ！」

肉体改造部より混沌としてるかもしれない。

いや、間違いなく混沌さでは上だろう。

（なんとかなる、なんとかなる……のか？）

京の新生活の幕開けは、疾風怒濤の出逢いと青春特有の破天荒さで彩られ、灰色の現実でも退屈せずに済みそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3890ba/>

アリスウォーズ

2012年1月10日01時50分発行